



一人ひとりが尊敬される 仲間関係づくり

阪本 明子 さん（人権と仲間関係研究会）



人権保育専門講座7では、「一人ひとりが尊敬される仲間関係づくり」をテーマにして、阪本明子さんに4歳児の実践報告をしていただきました。その後、グループに分かれて、報告にもある「できる・できない」によって決めつけてしまう子どもたちの様子等について交流しました。

《実践報告「いっしょに修行しようか！～これからも修行は続くのでござる～」より》

クラスのなかでしょうは好きな遊びが見つけれず、保育士が遊びを誘っても「しょう、難しい」と言う。いろいろなことに自信がなく、その気持ちを遊んでいる子にちょっかいをかけることでごまかしていました。まわりの子どもたちはしょうのことを疎ましく思い、排除するような姿も見られました。まわりの子どもたちがしょうに対して「遊びを壊す子」「できない子」と排除しようとしているのは、社会のなかに「できなければならない」という能力主義のきめつけがはびこっているからです。しょうも周りの子どもたちも能力主義の価値観に縛られている痛みの表れでした。そこで、私はきめつけを許さない、人権が大切にされる関係を通して、一人ひとりの育ちを豊かにしていくことが保育の原点であると捉え、そこにこだわって保育に取り組んできました。

「できる、できない」の結果ではなく、プロセスを楽しんでいくこと、自分がどんな友だちになっていくのかを見つけていくことを通して、きめつけを克服していくことにしました。子どもたちが興味を持った絵本『にんじゃごっこ』をきっかけにして、全体活動と日常的な遊び・生活をリンクさせて、保育士も子どもも忍者になり、「忍者の修行」をしていきました。「修行」はできないことからの出発で、やりつづけることが面白い・やってみようとする取り組んでいる自分や仲間が素敵だという価値観を子どもたちのなかに育てていきたいと思い、取り組みました。

能力主義や自己責任といった風潮が社会のなかにあるなかで、そのような子どもたちの姿を克服していくためには、私たち（保育者）は何ができるのか、具体的な子どもの姿を出し合いながら、ともに考える講座になりました。



【参加者アンケートより】

- 保育者が「できたね」と子どもを褒める機会は多くあるが、そのかわりが子どもたちに「できなければいけない」「できないことは悪いこと」という意識を植えつけてしまっていたところはないかと自分自身の保育を振り返りました。「できた」という結果だけを認めるのではなく、子どものできない姿に寄り添い、やってみようとする姿や頑張ってみようとする過程を大切にしていきたいと感じました。「できる」ことにこだわりを持つ子や活動をやりたがらない子など、様々な姿を見せる子どもたちがいますが、その姿が何故見られるのかをしっかりと考えながらかわっていきたく感じました。
- 保育士も子どもも忍者になり、忍者修行を通して、できないことに挑戦してみるというクラスづくりが素晴らしいと思いました。クラス全体で同じ方向を向くことで達成感を味わい、次はこんなことに挑戦してみたいと思える保育をしていきたいと、自分の保育を見つめ直すきっかけになりました。